
若様大志を抱く

沢山書世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

若様大志を抱く

【Nコード】

N6669Q

【作者名】

沢山書世

【あらすじ】

昔話風。女子にもてたい若様が、もて男になるために努力する話。若様は、もてる家来に対して、もてる方法を教えてほしいとは、立場上の面子があるため、正直には言えなかった。あれこれ理由をつけて、家来のまねをはじめてみるのだが、トンチンカンなことになってしまう。

(前書き)

共感していただけると、うれしいです。

昔々、武家が日本を支配していた時代、山奥のそのまた山奥のとある藩で若様と家来が暮らしておりました。二人の年齢は十三歳で、ため年でした。若様の名前は武千代、家来は五助といいました。

当時、日本の土地は現在の都道府県という分類ではなく、幾つもの藩という領土に分類されておりました。それぞれの藩では、大名つまり殿様が藩主として君臨し、土地と領民を統治しておりました。人々の身分は固定されており、大名家に生まれれば、支配階級として暮らし、家来の家に生まれれば家来として暮らしておりました。生まれながらの身分によってそれぞれがそれぞれの先祖の身分を代々継承して暮らしていた、そんな時代のお話です。

五助は小さいころから、若様の身の回りのことをしてあげたり、遊び相手になってあげたりしておりました。当時の常識から言って、この状態は当たり前のことであり、家来が一方的に奉仕する行為について、誰も不満を持って、一生こんなことやってらんねーよ、とふてくされてしまったり、疑問を持って、これってありなの？と誰かに訴えるようなことはありませんでした。

片や奉仕を受ける側も、何でもしてもらえる居心地の良い環境に不満など持つわけありませんでした。

当時、自分と他人とを比較することは、同じ身分の中だけのことに限られていたのです。身分を超えてしまえば平等、不平等という尺度はありませんでしたので、身分が違えば、比較の対象とはならなかったのです。双方が、これは当然のことと納得の上で、それぞれの役割をはたしていたのです。

ところが、ここの若様は一風変わっておりました。家来である五助に対して、ライバル心を持っていたのです。

若様は五助の評判が藩のおなご連中からすこぶる良いことに気付いておりました。若様からしてみれば、これは面白くない状態でした。

「自分がプリンスとして、おなごの視線を一人占めしたい。なのに現実には家来である五助の方が自分よりも人気がある。気に入らない」

と感じていました。

若様は何とかして藩内人気トップの座を手にしたいと思いました。当時の力関係からすると、気に入らない者が目の前に現れたとしても、父親である藩主にお願ひして当人をもっと山奥に左遷するなりの人事権を発動してもらえば、いとも簡単に邪魔者を排除できたはずですが、若様はその方法を取りませんでした。若様は、いつも身近にいてくれる家来のことを、一生付き合っていたい親友だと思っていたのです。若様は、ライバルを蹴落として、自分がトップになる方法は選ばず、自分の人気自体を底上げする道を選びました。若様は具体的に事実を検証分析し、五助に人気がある理由を導き出すことにしました。若様は、第三者の視点でものを見るスキルを持っていたのです。若様はまず、身分について検証してみました。

「家柄的には雲泥の差があり、自分のポイントだな」

と結論づけました。次に容姿です。

「顔の造り自体はどっこいどっこいだよな」

若様は冷静に分析しました。

「この時点では、ポイント的には一勝一分けで、自分が勝っている。おかしいな、気づいていない他の面で自分がポイントを落としている何かがあるはずだ」

と若様は思いました。自分になくて、彼にあるものはなんであるうかと、一生懸命考えました。出した答えは、

「わからないや」

でした。若様はなおも考えました。自分と家来の日頃の行動を箇条書きにして、じっくりと眺めました。そしてある結論を導き出し

たのです。

「自活能力、これだな。わらわには、これが欠落しているんだ」

「身の回りのことはすべて家来がやってくれるから、自分で服を着ることも、ご飯を作ることも今までしてこなかった」

「それに比べて五助は、自分のことは自分でできるうえ、わらわのことまでやってくれている」

「今のおなごたちは、世紀末の修羅場でも自力で生き残れる、生命力のある男を求めているのであろう」

「きれいなおべべを着てお神輿に乗せられているような暮らしをしている、やわな男には魅力を感じないのであろう」

「よし、やわな男からは脱却しよう」

と若様は思いました。

若様の、おなごにもてたいという強い一心が、自分のことを自分でできる男になりたいという目標を打ち立てました。目標が決まれば、次は対策です。若様は手っ取り早い方法は、現実にもっているやつに教わることだと考えました。幸い良い手本が家来兼ライバルではあるものの、身近にいたので、若様は交渉してみることにしました。

お城の若様の部屋で、若様は五助に話しかけました。

「わらわはこの国（藩）の若様で、未来の殿様だよな」

「はい、さようでございます」

「お主はわらわの家来で、今後もずっとそうだろ？」

「はい、さようでございます」

「わらわの方が偉いよな」

「もちろんでございます」

「ところがじゃ」

「はあ、ところが、なんでございましょう」

「いろいろな角度から見てみて思ったのだが、お主の方が、わらわよりも、出来がいいような気がしてな」

「何をおっしゃいますか」

「客観的にみると、わらわが逆立ちしてみてもお主にはかなわない、お主の方が偉い」

「滅相もございません」

「五助、お主は自分で服を着れるだろ？ 飯を炊けるだろ？」

「はい」

「わらわにはできないもの」

「たしかにそのような作業は、失礼ながら若よりも自分の方が上手にできると思います」

「な、そうだよな」

「しかしながら、私がやっていることは、私のお役目です。これは出来て当たり前のことで、若には必要のないものばかりです」

「たしかにお主のお役目じゃ。わらわが自分でやらなくても今まではお主がその役目をはたしてくれていた。おかげでわらわはこれまでしのいでこれた。これからもそれでやっていけるとは思うよ。しかし、なんだか、そうゆう家来の仕事のなかには、成長期の人間形成にあたって必要なことがたくさん入っているんじゃないのかなーと思うようになってきたのじゃ」

「そうでしょうか」

「うん。それは今のわらわとお主を比べてみればわかることじゃ」

「はあ」

「たとえば顔立ちなんかを比べてみると、造作自体は引き分けだと思ふのだが、いかんせん、表情が違う。わらわは口を半開きで、ぼーっとしているだろ。はなをたらししていることも多い。いかにもといった表情だ」

「」

五助は確かに、と思っていました。

「それに比べて、お主はきりりとしまりのいい口元をしており、精悍な表情じゃ」

「」

五助は毎日必死に生きている平民ならこれで普通だ、と思っていました。

「生まれたときは、わらわの方がかわいかったのにと、乳母が嘆いているのを聞いてしまったことがある」

「」

五助はよくある逆転劇だ、と思っていました。

「わらわの表情にしまりが無いのは、甘やかされてきたことが原因に思えてならないのだよ」

「」

五助はそれは一理ある、と思っていました。

「いいものを食べさせてもらい、いいおべべを着せてもらい、何不自由なく育ってしまった結果がこれよ」

「」

五助はそうかもね、とは思いはじめていました。

「方やお主は貧乏侍の五男坊。お新香のしっぽを食って、兄姉のお下がりを着て育ったら、こんなに立派になってしまった」

「」

五助はけなしておいて褒めるとは、逃げ道を用意してからなぐる行為で、ずるいなと思いました。

「お主はおのれの境遇を嘆いて、ひねくれてもよさそうなものを、愚痴ひとつ言わず、わらわに尽くしてくれる」

「家来の身分ですから、苦勞は当たり前です」

五助は本心から言いました。

「その苦勞がお主のいい表情をつくったのじゃ」

「そうでしょうか」

「くだいようじゃが、元々の造作が引き分けなのじゃから、そうに違いない」

「はあ」

五助は、引き分けには納得できないが、立場上とりあえず同調しておきました。

「顔の話はこれまでにして、次は仕事面じゃ」

「はい」

「以前お主が城壁の修繕を提案したことがあったであろう」

「はあ、ございました」

「あれは重臣会議ですんなりと通ったよな」

「おかげさまで」

「一方、わらわの提案は、考え直してくれと皆に止められた。五人がかりで説得された。ようは満場一致での反対をされてしまい、却下となってしまった」

「あれは少々難のある提案でしたかも」

「お主もそう思うか」

「冬が寒いからといって、暖かいところに城ごと引っ越すというのは、いささか・・・」

「みんなが喜ぶ名案だと思ったんだがな」

「千年早かったようですね」

「そんなこともあり、重臣達の中では、わらわは世間知らずの非常識やろうだと写っている」

「はあ」

「方や、お主は世間の荒波をもろに受けながら自分のことやわらわの面倒を見ることで、一般常識をどんどん身に付けてきた」

「はあ」

「つまり、常日頃の生活習慣が顔や仕事っぷりに影響して、今の二人の明暗を分けたということじゃ」

「はあ」

「そこでじゃ！」

若様は膝を叩いて一呼吸置くと、話を続けた。

「わらわは人生を一からやり直すことにしたい」

「それでは、若は、これからは自分のことは自分でなさりたいと。そうおおせですか」

「うん。それをお主に教わりたいのじゃ」

五助は慌てました。

「それでは私が困ってしまいます。商売あがったりです。お役目を失えば私の顎が干上がってしまいます」

「そうなってしまふかー。たしかにそれは困るよなー」

「はい、何とか考え直していただけないでしょうか」

「でもなー、こっちも困るんだよなー」

若様は、天井を眺めながらしばらく考えました。そしてふーっとため息をついたのちに再び話し出しました。

「大奥では、しょっちゅうお主の話題で持ちきりだ」

「私が大奥で話題に」

「うん。それに比べてわらわのことはちつとも話題に浮かばない。悪口すらでないありさまじゃ。さびしいよ。噂の一つもしてもらいたいものだ」

「」

「お主がうらやましい」

「」

「近頃は、お主の方が、若様に向いているんじゃないかと思ったりする」

そう言うと、若様は、うわーんと泣き出してしまいました。これから持ちかけるお願いを五助に飲ませるためのウソ泣きだったので、それを知らない五助は、うろたえてしまいました。立ち上がって若様に近づくと、なだめに入ったのでした。

「若、どうか冷静に」

「うわーん、お主がうらやましい、出来る事ならわらわと代わってほしい。けれど、現実的には立場を入れ代わるわけにはいかない。お主の役目を取り上げるわけにもいかない。どうしようかなと、考えた結果、名案が湧いた。わらわはやはりお主のまねをすることにしたい。その名目を、江戸で今はやっている体験型学習を取り入れ

たということにしよう。お主の肩書は生活道の指南役とする。この条件で、どうかこれからの毎日、わらわをお主と一緒に行動させてくれまいか、うわーん」

「生活道？ 聞いたことありませんが」

「江戸の常識と言えば、城内では通ってしまうさ、うわーん」

「田舎者の弱みに付け込むんですね」

「これでお主の役目も保てるのじゃ、どうか目をつぶってくれ、うわーん」

「わかりました、それはいいとしましょう。しかし私の役目を保てたとしても、もう一つ別の懸念が私にはあります」

「言ってみろ、うわーん」

「ときには我慢を必要とする、不便きわまりない生活ですよ。私としては若をそんな目に合わせたくはありません」

「苦勞はいとわん。自分を磨いて、末は民のために尽くしたいぞよ、うわーん」

その言葉を聞いた五助は驚いた。

「えっ、若にそのような志があたりで？」

「うわーん、もし苦行に耐えられなければ、その時は潔く諦めるよ。うまくいかないかもしれないけれども、せめてチャレンジくらいはさせてもらえまいか、うわーん」

「若、民のためにそこまでお考えなのですか。そういうことならわかりました、微力ながら私に協力させてください。よよよ」

家来は若様のウソ泣きでもらい泣きしてしまいました。

「うまくいったな。本当はおなごにもてたいだけだよ」

と、若様は心の中で舌をだしたのでした。

次の日の朝早く、若様はお城を出ると、城下町の五助の家に向かいました。

「五助、来たぞー」

若様の声に気付いた五助は慌てて家から飛び出してくると、

「一人でいらっしゃったんですか？」

と若様に質問しました。

「うん」

「道中、誰かに見られませんでしたか？」

「誰にも会わなかったな。朝早かったせいかな」

「よかった」

五助はほっとした様子でした。気を取り直した五助がさらに若様に質問しました。

「若、こちらからお迎えに上がるべきところを、自らいらっしゃるとは、なんでまた」

「何を申す、教わるのはこちらだ。わらわから出向くのが筋であろう」

「おっしゃることはごもっともですが、このようなことは今日だけにしてください」

「なぜじゃ」

「今日はたまたまラッキーでしたが、いつも人に見られないとは限りません。若がうちに來ることが町内の者たちに知られてしまう恐れがあります」

「たとえ見られたとしても、それがわらわだとは誰も思うまい。心配いらん。まさかわらわが城下に一人で現れるとは、住民には思いもよらないことであろうからな」

「解りますよ。若は目立ちすぎますから」

「目立つかな」

「若は立ち居振る舞いに品がありますから、誰が見ても解りますよ」
「そうかな」

若様はまんざらでもない様子でした。

「それに、そのようなきらびやかな服を着ている者は、平民の中にはおりません」

「普段着なんだがな」

「とにかく、その出で立ちはいただけません。私の服をご用意しま

すから、これからはそれを着てすごしてください」

「お古か、気が進まないな」

「わがままを言わないでください。お願いします」

「解った、お主が指南役だ。言うとおりにするぞよ」

「ありがとうございます」

「でも、わらわが来たことが民にわかると何か不都合があるのか？
わらわはいっこうに構わないのだが」

「わかれば町内が大騒ぎになってしまいます」

「地域が活性化するのは悪いことではないであろう」

「活性化と騒ぎは別物です」

「そういうものか」

「ええ。それに、住民に気付かれると若はサイン攻めにあわれてしまいますから、そうなると訓練どころではなくなってしまうですよ」

五助は若様を気遣い、オベンチャラをいれて説得を試みました。

「サインするのはいいとしても、訓練できなくなるのは困るな」

「解っていただけましたか」

「うん」

「秘密裏に動かなければ、訓練できないのです」

「そんなもんかなあ」

「そんなものです。若には平民に化けて過ごしていただきます」

しぶしぶながらも納得した若様は、五助の住まいにおじゃまして
服を着替えました。

「どうじゃ、似合うかな」

若様が五助に聞きました。みごとに似合っているのだが、平民の
服が似合うとは言いにくい。五助は話をはぐらかせました。

「若、時間ですから早速寺子屋に行くとしましよう」

「うん」

道すがら、五助が若様に言いました。

「若、これからのこととお願いがあるのですが」

「なんだい」

「寺子屋では自分のことをわらわとは言わないでください。俺といってください。」

「わかったよ」

寺子屋に到着した二人は先生のところへ挨拶に行きました。

「先生、見学者を連れてきたのですが」

五助が先生にそう申し出ました。

「そうか。名前はなんと申す」

「名前ですか。・・・たろべえ、と申します」

と、先生に聞かれた五助は答えました。

「俺がたろべえ？ 変な名前をつけやがって」

と若様は小声で隣の五助に文句を言いました。

「いい名前じゃありませんか」

「そうかなー」

「そうですよ」

「城下ではこの名前がいい名前なのか？」

二人がこそそこそともめているところに、先生が、割って入りました。

「たろべえとやら」

と先生が若様に声をかけました。

「はい」

「変な名前だな」

やっぱり変だったんだと若様は思いました。

「自分でつけたわけではありません。文句は名づけ親に言ってください」

若様はむっとした表情で答えました。

「それもそうだな」

「はい」

「名付け親は誰なのかな」

「お答えしなければなりませんか？」

「名付け親が誰なのかを聞かなければ文句を言えないであろう」

「本当に文句を言うつもりなんですか」

「お主が言いにくいであろうから、私が代わりに言ってあげようと思っただのに」

「それはけっこうです。で、見学をさせてもらえるのでしょうか」

「よろしい、見学を許可しましょう。名前と一緒に、ちょっと足りなそうな顔をしておるが、解らないなりに、耳を働かせて、勉強していきなさい」

「ありがとうございます」

先生は、二人を残して教室へと向かいました。

「とっさのことで、気の利いた名前の用意をしていませんでした。どうか我慢してください」

五助はたろべえに詫言いました。

「とっさにこの名前が出るということは、普段からそういった目で俺を見ていたのであろう」

たろべえはふくれっ面で五助に文句を言いました。

「めっそもございません。単なる思い付きです」

五助は一生懸命に言い訳をしました。

「今日は藩の歴史について学びます」

「よろしく願います」

生徒総勢二十人が先生に挨拶をして授業が始まりました。

「わが藩では、代々名君とすつとこどっこいが交互に藩主に着任してきています。成長期と荒廃期を繰り返して今日まで歩んできました。三步進んで二歩下がる藩だと世間では噂をされています。」

先生が五助に聞きました。

「今の殿はどっちなかな」

「名君です」

「そうですね、よくできました」

次に先生はたろべえに聞きました。

「次の殿、つまり今の若様はどっちかな」

たろべえは答えました。

「未来のことはわからない」

「わかるであろう。歴史は繰り返すものなんだよ」

「今までがたまたま繰り返してただけだ。今の若様には、いいやつが側近についているから、歴史を変える可能性がある」

「側近が良くても、トップのすつとこどっこいは治らない」

「お言葉ですが、たとえば先生が側近になってもですか？」

「無理だねー」

いずれ切腹させてやるから覚えておけよ、とたろべえは思いました。

「言い争いはおやめください。授業を続けてください」

と五助が仲裁に入りました。子供相手に熱くなるのは大人げないなど、五助の言葉を受け入れた先生は、本題に戻りました。

「今の殿は名君で、順番から行くと、今度はすつとこどっこいが後を継ぐことになります。今の殿には百歳までは頑張っていただきたものです。どうかみんなも殿の健康を祈ってください」

たろべえが五助にささやきました。

「本人を前にして、好き勝手を言っていやがる」

「先生なりに、藩の将来を愁いているんですよ」

と五助がたろべえをなだめました。

「あいつ、俺が若だと気付かないふりをして、本当は解っていて言ってるんじゃないのか」

「そんなわけはないでしょう。どうかお願いですから、抑えてください。爆発はしないでください」

五助はひやひやさせられっぱなしでした。

二時限目の授業は経済でした。

「昨年の藩の収入は百万両。支出が百二十万両でした。たろべえ、こういう状況を何と言いますか？」

「赤字です」

「そうですね。誰でもわかりますね」

「ムカツ。いちいち気に障るやつだな」

とたろべえは思いました。

「ところが赤字にもかかわらず、藩はつぶれません。何故かという
と、五助理由を答えなさい」

「はい。藩の財政に余裕のあったころ、浪費をせずに蓄財してありました。余裕のない今、それを切り崩して、使っています。今の殿
がそうして藩の財政を安定させてくださっているのです」

「よくできました。今の殿のおかげですね。次の殿はあてになります
せんが」

先生は念を押しました。

「くどいやっちゃな」

とたろべえは思いました。一方の五助は、先生の、若に対する悪
口を聞くに堪えなくなり、

「先生、お言葉ですが、お城の若に対して、ひどすぎる発言だと思
うのですが」

と参戦するが、

「若様の重臣からの評判は、君も聞いておろう。いくら君が側近に
いるからといって、この場所でかばうことはあるまい」

と先生は持論をまげませんでした。

当事者であるたろべえはというと、先生の聞き捨てならない発言
に不服はあるものの、

「父上は随分と民に慕われているんだな。たとえクーデターが起
こっても、こういう民が父上を支えてくれるのであろう」

と、思いはじめていました。

寺子屋での授業が終わると、若様は五助の家で食事をごちそうになりました。

「若、出されたものを残さずに食べますか？」

「がんばってみる」

「残してしまっは、作ってくれたお百姓さん、買ってくれた父上、料理してくれた母上、そして、藩の平和を維持してくれている殿に申し訳が立ちません」

「心配いらん、任せておけ」

若様は箸を口に運びました。

「ぐっ、まずい」

と思わず口から吐き出しそうになった若様でしたが、それをこらえました。

「いつもこんなものを食っているのか？」

「ええ」

「文句も言わずにか」

「はい、食べ物には精一杯の感謝が大事なんです」

「そんなもんかね」

「いろいろな人の苦勞の賜物ですからね」

「そういえば、俺は、父上には感謝しているよ。それはみんなと同じで、俺もそうだけれども、父上以外の人、領民達への感謝の気持ち俺にはかけらもねーな」

「お父上にだけでも感謝しているんなら、まだ救いはありますよ」

「あるかね」

「ええ。感謝の意味すら分からないやつがいる昨今です。それではどうにもしようがありませんからね」

「父上の次は百姓、料理人に感謝か」

「はい」

「努力してみるよ」

「努力ではなく、日々暮らしていると関わっている人に対して自然にわいてくるものなんですけどね」

「わかないこともあるだろう」

「ありませんねー」

「じゃあ、寺子屋の先生に対しては、どうなんだい？」

「先生とは意見の対立はあっても、いろいろな考え方があることを教えていただけて、感謝しています」

「そういわれてみると、俺もあの先生にはくそみそに言われはしたものの、不思議なことに、だんだんと叱咤激励されたような気になつてきたんだよねー」

「若、そうですよ、受け取り方次第で、どうしても解釈できますよね」

突然若様が叫びました。

「そうか、五助にあつて俺に足りなかったものがわかったぞ。感謝なんだな」

「それだけではありませんよ」

「え？」

「いえ、なんでもありません。若、それに気付かれましたか。よかったですね」

「ちよつとひっかかるが。まあそれはさておき、今日は収穫があつてよかったよ」

「よかったですねー」

「感謝だよな、感謝。五助、今日はどうもありがとう。明日もよろしくな」

若様を玄関先で見送つた五助はこう思っていました。

「感謝の大切さを随分力説していったなー。それに気付いてくれたことはいい事なんだが」

「ところで昨日目標だと言っていた自活力、あれはいったいどうなるんだらう。寺子屋についてきて、飯を食って帰ってしまった。とうとう、うちのことは何ひとつ手伝ってくれなかったなー」

「ま、いいか」

「どうやら若様は成長へのきっかけをつかんでくれたようだし。まずは第一歩をふみだしてくれたんだから、よしとしよう」

もてる男になるために自活能力を身に着けるぞ、という当初の目標は、初日の時点でどこかに忘れてきてしまったようですが、代わり人間には感謝の気持ちが大切なんだということを若様は学んだのでした。めでたし、めでたし。

(後書き)

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6669q/>

若様大志を抱く

2011年7月23日03時28分発行